

屋外飼養による肥育技術に関する試験

—宮崎県の肉牛飼料給与基準（和牛去勢若令肥育）の実証について—

黒木 寛・横山文泰・図師隆一・長友邦男・岩下 忠・井好利郎

（宮崎総合農業試験場）

KUROKI, H., YOKOYAMA, H., ZUSHI, R., NAGATOMO, K.,
IWASHITA, T. and IYOSHI, T.

Fattening Experiment of Beef Steers on the Feedlot.

—Adaptability of the Feeding Level for Boof Steers in Miyazaki Prefecture—

1. 試験目的

「宮崎県肉用牛生産合理化推進協議会」が作成した、肉用牛肥育のための飼料給与基準（表-1）について実証試験を行なったので、その結果を報告する。

2. 試験方法

供試牛は生後8ヵ月令の黒毛和種去勢牛16頭を用い、360日間（昭. 48. 11. 24～昭. 49. 11. 19）の肥育試験を行った。試験区分は基準どおりに行った基準区と中期以降、加給している圧ペン麦を同量の肥育配合と代替して給与した試験区の2区を設定した。管理は屋外群飼とし、1頭当りの飼育場面積は10㎡とした。

3. 試験成績

増体成績は図-1に示すとおりである。開始時体重は基準区254kg、試験区255kgであり、終了時体重は両区とも585kgであった。その間の1日当り増体量は両区とも0.92kgであった。これを基準の目標増体量と比較すると、1日当り増体量において、基準の0.80kgよりも0.12kgすぐれていた。また、基準区と試験区の間には差は認められなかった。

飼料の採食状況については、1頭当り、濃厚飼料2,175kg、生草, 1,920kg、乾草, 600kgを給与したが、その採食率は濃厚飼料、生草については両区とも、約100%、乾草については基準区88%、試験区98%であった。乾草の採食率は品質の影響が考えられたので、この点に留意すれば基準量は採食できるものと考えられた。

枝肉形質については両区とも、ほぼ同様な成績であり、肉質に対する大麦添加の有無による差は認められなかつ

表 1 和牛若令肥育の飼養管理基準

肥育期	月令	発体 育目 標重	1日1頭当り 給与量 (kg)				飼養管理上の注意事項
			濃飼 肥育 配合	厚料 圧 人	粗飼料		
					乾草	生草	
前期	9	274	4.0	—	1.5	8.0	○導入直後は下痢に注意して、7～10日は濃厚飼料の給与を控え、良質乾草を給与し、導入時体重に早く戻す。 ○1回目の寄生虫駆除、削蹄を行なう。
	10	298	4.0	—	1.5	8.0	
	11	322	4.5	—	1.5	8.0	
	12	346	4.5	—	1.5	8.0	
中期	13	373	4.5	1.5	1.5	8.0	○ホルモン剤の1回目使用 ○2回目の寄生虫駆除を行なう。
	14	400	4.5	1.5	1.5	8.0	
	15	427	4.5	2.5	1.5	8.0	
	16	454	4.5	2.5	1.5	8.0	
後期	17	475	4.0	3.5	2.0	—	○ホルモン剤の2回目使用
	18	496	4.0	3.5	2.0	—	
	19	517	4.0	3.5	2.0	—	
	20	538	3.5	3.5	2.0	—	

注) サイレージ給与の場合は省略。飼養管理上の注意事項は主なものだけ抜萃。

た。

4. 要 約

以上のことから、給与基準はほぼ妥当であることが実証されたものと考えられる。また、大麦添加の有無による肥育成績の差異は認められなかった。

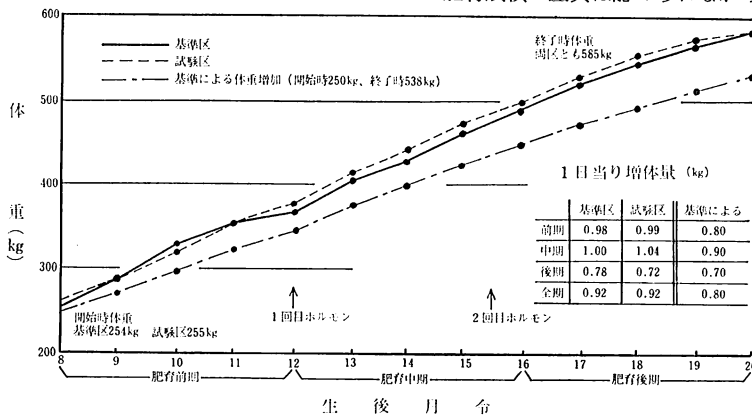


図 1 体 重 の 増 加